日本の伝統文化〝盆栽〟を独自の世界観で表現し継承する

盆栽師

平尾成志（まさし）さん

聞き慣れない肩書きに出会ったとき、肩書によっては仕事内容が分かりやすい場合と、そうでない場合がある。

平尾成志さんの肩書は〝盆栽師〟。

そう聞くと、盆栽を作る職人さんだろうと誰もがぼんやりと想像できる。

実際、彼の仕事場には大小様々ないくつもの盆栽が並び、出番を待つ盆栽鉢が積み重ねられていた。けれど、話を聞けば聞くほど、盆栽を作る職人というにはあまりにもアーティスティックで芸術性が際立っていた。

材木商の末っ子。「初めて木の切れ端に興味を持ったのは小学校よりもっと前かな。池田町の実家の近くの山で遊ぶのが好きで、みんなはテレビゲームしてたけど、僕は木の切れ端を探して剣にしたりするのが好きだった。それはもう悪ガキでね（笑）。なんかあるとすぐ〝まさしがやったんじゃないか〟って言われるくらい（苦笑）。親はしょっちゅう頭下げて回ってくれてました」

そんな息子を見て両親は、有り余る体力を何かにぶつけさせなければいけないと思い、小学時代からサッカーや水泳を習わせた。「で、小3ぐらいでピタリとやんちゃはしなくなりましたね（笑）」。また、「当時、池田中学はサッカーが強くて、セレッソ大阪のジュニアユースとの試合ではゴールも決めて、勝ったりしてたんです」という。

美馬商業高校（現・つるぎ高校）に進学すると、父親がサッカーより陸上に力を入れろと言い出した。美馬商の男子陸上部は全国高校駅伝に出場していた強豪校で、その後、9年連続出場を果たしている。

「陸上部に入部したのはいいけど、1年のときに足を骨折してしまって。治って2年になっても陸上を真面目にやらずに遊んでばかりでした」

その彼が一念発起。「陸上に一回バカになってやってみようと思って」

高校総体に出場し、3000メートル障害で優勝。決めたことには膨大なエネルギーを費やすのだろう。その瞬発力は並外れている。

大学進学は考えていなかったが、父親の強い希望で進学することに。とはいえ、陸上に熱心だったが、特に受験勉強はしていなかったため、陸上で声をかけてくれた京都産業大学に進学を決めた。

大学在学中、京都にある東福寺が見たいという祖母と寺を訪れた。

「庭園に入った瞬間、庭に吸い込まれるような感覚が走って衝撃を受けたんです。重森三玲（しげもり・みれい 1896～1975年。岡山生まれ。作庭家、庭園史研究家）の代表作といわれる方丈庭園。昭和初期の作品で、星座を表現した〝北斗七星の庭〟や市松模様のモダンな庭があって、国指定の名勝だと。こういう、伝統や文化を継承していく仕事をしたいと思いました」

後に、父親に卒業後の進路を聞かれたとき、「庭師になりたい」と答えている。

「大学を卒業したら、何をしてもいい」という言葉を父親から引き出していたため、意地でも卒業したかった。ただ、問題はその大学の卒業。それまでにわずか7単位しか取れていなかったため、レポートを書いては担当教官のハンコをもらいに行き、何とか卒業に必要な単位を取得。

「自分のすることなどに反対されて周りが理解してくれないとか言う人がいるけど、理解してもらうのを待ってるんじゃなく、自分が理解してもらえるように変わるのが一番早いんですよ」

きっぱりと潔い言葉に平尾さんの芯をみた気がした。

2003年、大学卒業と同時に〝盆栽の町〟で知られるさいたま市で170余年にわたる老舗盆栽園、蔓青園の門を叩いた。

4代目、5代目の面接を受けていたら、80過ぎの3代目が2階から降りてきて、「盆栽はこれから世界に出ていかなければいけない。盆栽やってみるか」と加藤三郎氏に弟子入りを許可される。

「修行期間は5年。給料は6万円でした。僕の前までは住み込み制度があったんですが、僕の代からはそれがなくなっ

て。近くにアパートを探したら家賃が6万5千円。給料より高かったんです（笑）。家賃だけは父親が面倒を見てくれると言ってくれたのでありがたく受けていました（笑）」

修行期間中、近所付き合いも大事にした。庭で野菜を作っているお婆さんが野菜を持ってきてくれたり、飲みに誘って奢ってくれる人がいたり、ご馳走してくれる人もいた。

「1人で木と向かい合うだけの5年間だったら苦しかったかもしれないですけど、そういう人間関係があったので苦しくはなかったです」

そんな生活の中で、盆栽への思いに変化が見えた。

「難しく考えるから難しいんだなってことですね。掃き掃除をして、盆栽に一本ずつ触って。鉢を持ち上げてチェックもして、毎日ちゃんと見続けていると表情が見えてきた」。盆栽には千年をゆうに超える樹齢を重ねた名品もある。「水やりの時は状態をよく見て、天気も考慮しなければいけない。一本一本に命を与える感覚ですね。土の渇き方で盆栽は大きく変わってしまいますから。夏に弱い木には日除けをしたり、冬はビニールハウスに入れたり。寒暖差にも気を使います」

盆栽のルーツは中国の盆景。それを平安時代に日本人が一つの鉢の中で栽培して盆栽とした。その頃から鎌倉時代くらいまでは、盆栽は特権階級の人だけのものだった。それが江戸時代になると庶民にも広がり、文明開花で外国人に知られる所となり、今や錦鯉同様、非常に人気が高い。

２００８年、蔓青園の研修課程を修了した平尾さんは専属管理師に就任。翌年にはスペインで盆栽技術指導を行い、その後はアルゼンチンで盆栽デモンストレーション。イタリア、フィリピンでのジャパンフェスティバル出展、オランダ、フランスでは大宮盆栽代表としてデモンストレーションを行うなど、毎年海外に出向き、２０１３年、文化庁文化交流大使に任命された。

文化交流大使就任後は4カ月で世界11ヵ国を周り、日本文化・盆栽の美意識や楽しみ方を教えたという。

「盆栽は凝縮と引き算の美学で、飾り方や余白を楽しみます。それらを計算しながら仕上げていくので、短時間では厳しい。海外でのパフォーマンスも最初の頃4時間くらいかかったんです。すごくたくさんの方が集まって見てくれていたのですが、完成したときに人が少なくなってしまっていた。これではダメだなと。ちゃんと最後まで見届けてもらえないと意味がない。人が集中して見てくれるのはせいぜい40分です。だったらバンドがライブしている横で盆栽のパフォーマンスをさせてもらえれば、完成までちゃんと見てもらえるんじゃないかと」

平尾さんが得意とする音楽と盆栽の新しいコラボレーションの始まりだった。

海外では、現地の人が自分の盆栽をワークショップに持ち込んでくる。平尾

さんはその全てを一本ずつ見て回るため、それだけで朝から深夜までかかることもある。そして丁寧にアドバイスする。

「日本人より海外の人の方がテクニックについての質問が貪欲です」

丁寧で的確なアドバイスは盆栽愛好家にあっという間に広まり、盆栽のデモンストレーション、ワークショップ、パフォーマンスを柱にした活動などで、２０１７年12月、日経ビジネス「時代を作る１００人」にも掲載され、大きな注目を集める。

「盆栽だけを見せても、盆栽園は座るところはないし、初めての人は来にくいかもしれないですし。その点、オーガニックコスメやヨガとコラボすると楽しく盆栽を見てもらえます」

ある大学に招かれて、盆栽美をテーマに話し、正月の寄せ植えの作り方を伝授すると大きく盛り上がったそう。日本の伝統が継承されることを願い、小学生がお小遣いで参加できる盆栽初心者向けの講習会開催にも熱心だ。

大手デパートのフロア内展示やギャラリーのオープニングパフォーマンス、大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭への出展など平尾さんの活躍の場は広く大きい。

そんな平尾さんが心に留めている言葉がある。

「前に父が〝真面目に遊べ〟って言ったんです。これってすごく重要なことで、仕事柄、高齢の方たちと話す機会も多いので、真面目に遊ばないと懐に入れてもらえませんから」

そして平尾さんは真面目に遊ぶための場をさいたま市に作ってしまった。『成勝園（せいしょうえん）』

父・勝さんと自分の名を合わせて名付けた。

記憶にはなかったが、祖父が「木を切る商売だから、せめて育てないと」と、盆栽をしていたらしく、実家に残っていたいくつかの盆栽を持ち帰り、手を入れはじめているという。「やんちゃな時代にいくつか壊したかもしれないですねえ（笑）」

盆栽の制作や管理はもちろん、盆栽と向き合うだけでなく、近所の人たちを招いてバーベキューに興じることもある。

木々や葉の様子、土、苔などと会話しながら遠大な時間の先を見て作品を仕上げていく盆栽師、平尾成志さん。集中力と瞬発力、感性と行動力、周囲が変わるのを待つのではなく自分が変えていく精神力。彼は盆栽と共に生き、盆栽をどこまでも貪欲なほどに愛して突き詰める芸術家なのだろう。

（取材・文／北島由記子　写真／永井守）